

# 老人看護学における教育の評価

## —自己評価に基づく教育効果の検討—

松浦治代・宮脇美保子・井山壽美子

Haruyo MATSUURA, Mihoko MIYAWAKI and Sumiko IYAMA

### The evaluation of education in gerontological nursing —On the basis of student self-evaluation—

老人看護学は平成2年度実施のカリキュラム改正によって独立した新しい領域の学問であり、教育の内容や方法は試行錯誤の段階である。

また、看護大学生は老人および老人ケアに対して、肯定的態度と否定的態度を混在して示すと言われて<sup>1)</sup>いる。このような社会的背景には、老化に伴って現れる、心身の変化を表面的に捉えた結果、「病弱」「依存的」「頑固」「汚い」などといったマイナスイメージを抱いていることが影響しているものと考えられる。さらに、学生の多くは祖父母と身近に接することなく成長してきた傾向にあり、老人に対して自分とはかけ離れた存在の人として捉えているようである。

ここでは、「老人看護学における教育方略の評価」<sup>2)</sup>において報告した体験学習、模擬授業を含む老人看護学の授業を受けた学生を対象に、教育に対する自己評価を行った。授業開始前および終了時における老人に対する関心、理解および老人看護に対する関心の変化とその理由から教育の効果を検討した結果、教育方略との関連が示唆されたので報告する。

#### 対象と方法

医療技術短期大学部看護学科2年生76名を対象とした。

学生による自己評価は老人看護学に関連する、老人看護学概論1単位、老人保健1単位、老人臨床看護学2単位の3教科、計4単位、90時間の終了した時点で行った。

評価内容は学生の老人に対する関心度、老人に対する理解度、および老人看護に対する関心度とした。個々看護学科

の学生はそれぞれの項目を「ほとんどない」「あまりない」「普通」「少しある」「とてもある」の5段階で評価記入し、さらに各項目について変化の理由を自由に記入した。これらの集計数をヒストグラムに表し、教育の効果进行分析した。検定には $\chi^2$ 検定を用いた。

#### 結 果

##### 1 老人に対する関心度の変化 (図1、表1)

老人に対する関心度は、授業開始前には、無関心側に傾いており、「少しある」13.1% (10名)、「とてもある」2.6% (2名)を合計した、関心の高い率は15.7%であった。有関心者の理由には、同居・ボランティアなどにおける「老人との交流」が多く挙げられた。それに対して、関心の低い率は、「あまりない」38.1% (29名)、「ほとんどない」32.6% (18名)を合計した70.7%であった。関心が低い理由には、「老人に接する機会がなかった」「知らなかった」「考えたこともない」が挙げられた。このことから授業を受けるまで老人問題を身近に考える機会がなく、意識してこなかったことが、関心度の低さにつながっていたと明快に言うことができる。

授業終了時点における評価では、ほとんどの学生の関心が高まり、「少しある」59.2% (45名)、「とてもある」30.2% (23名)の合計は89.4%に達した。有関心者の理由には「体験学習」の効果も挙げたものがあった。意識すれば、学生は老人の生活を知ることによって、徐々に偏見が拭き去られ、老人とはステレオタイプ的なものでは決してなく、個性豊かな、学ぶべき存在であることに気づいていったと考えることができ

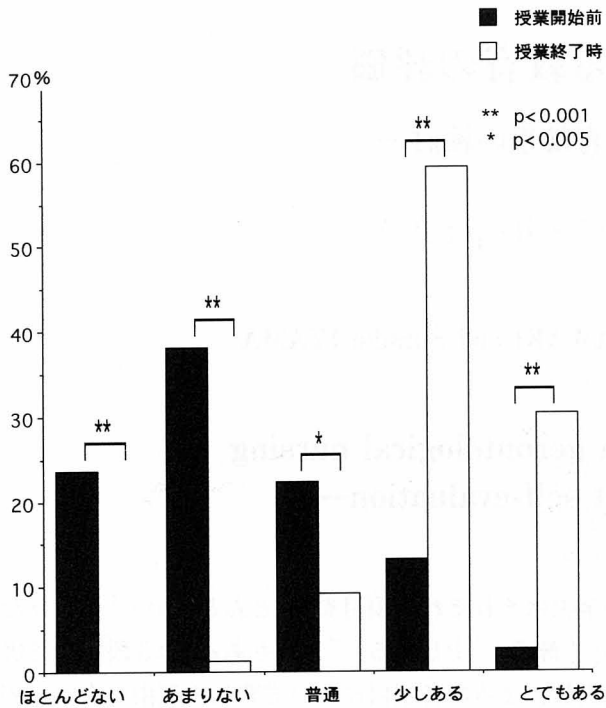


図1 老人に対する関心度

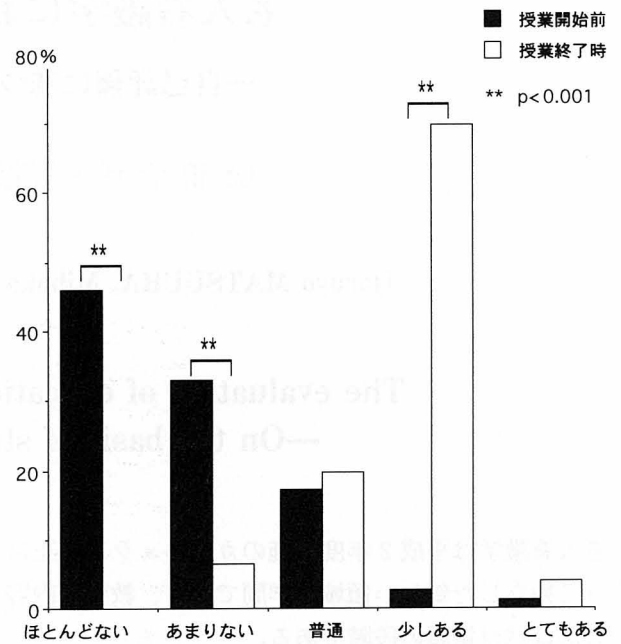


図2 老人に対する理解度

表1 老人に対する関心度・理解度および老人看護に対する関心度の異なる理由

	授業開始前	授業終了時
関心度高い	看護の必要性があるイメージ（弱者・寂しい存在） 交流があった（祖父母との同居、ボランティア、老人ホーム訪問） 祖父母の病気 高齢社会 自分の老いを感じた 老人看護がしたい	ステレオタイプな見方がなくなった 老人の特性を知った 知らなかった分野だけにおもしろいと思える イメージが変わった 社会的弱者としての現状を知った 元々興味があった
関心度低い	老人に接する機会がなかった 悪いイメージ（うるさい、じゃま） 知らなかった 否定的感情（嫌い） 体の弱い成人程度の認識	実際に接したことがない 看護が必要な弱者としての見方が変わった
理解度高い	老人との同居で自分なりに理解していた 決めつけていた部分もあった	老人と触れあうこと 自分で調べる、学ぶ 他の人に教える 他班の発表を聞く
理解度低い	一般的な老人しか知らなかった マイナスのイメージ（汚い、じゃま、弱い） 嫌い 関心がない 知りたくない・知ろうとしなかった 身内だけの理解	実際にはあまり接しなかったから 比較すると理解はできているが、不十分
老人看護に対する関心度高い	訪問・在宅・地域看護がしたい（関連する分野） 祖父の病気 老人看護がしたい	現実と理想のギャップからやりがいがある 身内（自分で面倒みたい） グループワークから以前より知ることができ 考えれば考えるほどやりがいがある 講義で老人の特徴を繰り返し教えてもらった 講義だけでなく自分の眼で確かめたこと 自分たちも老いていく 元々興味がある
老人看護に対する関心度低い	偏見・誤解があった やりがいがない （死に近い、成人に少し手を加える程度のもの、食事と排泄の世話と褥瘡予防だけ） 老人自体知らない 老人看護の存在を知らなかった 他の分野に興味がある（小児、母性など） 寝たきり老人のケアは大変そう 何がやりたいか具体的にない	理想と現実のギャップからやりたくない 知るほどに自信が持てなくなった（未熟さの実感） 看護するにしてももっと勉強が必要 向いてない 他の分野に興味がある（小児、母性など）

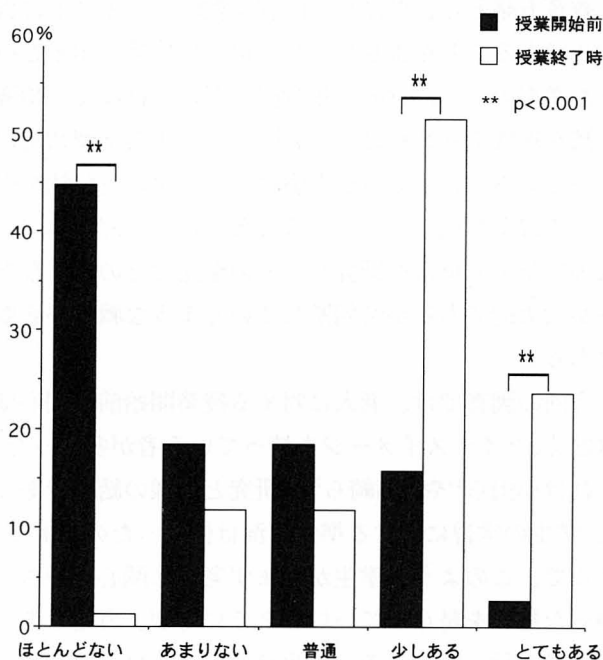


図3 老人看護に対する関心度

る。

一方、授業終了時においても、関心度に変化のない率、あるいは低下した率は、3.9% (3名)であった。その理由として「あまり老人と接しなかった」「老人を絶対的弱者としてみていたが、そうではないことがわかり、逆に看護の対象としての関心が薄れた」などが挙げられた。

### 2 老人に対する理解度の変化 (図2、表1)

老人に対する理解度については、授業開始前では無理解側に傾いており「ほとんどない」46.0% (35名)、「あまりない」32.8% (25名)であり、その合計は78.8%であったが、授業終了時には「少しある」69.7% (53名)、「とてもある」3.9% (3名)の合計は73.6%であった。

授業開始前における老人に対する理解度の低い理由としては「関心がない」「マイナスのイメージ」「表面的な理解のみ」あるいは「自分が接触した範囲内での理解」といった偏った理解の仕方を振り返る者があった。

次に授業終了時点における学生の理解度が高くなった理由としては、「老人との触れ合い」「自発的な学習」「話し合い」「他班の発表」など教育方略に関するものを多く挙げていた。さらに模擬授業における「他班の発表」にみられるように、「発表者の苦労がわかるので

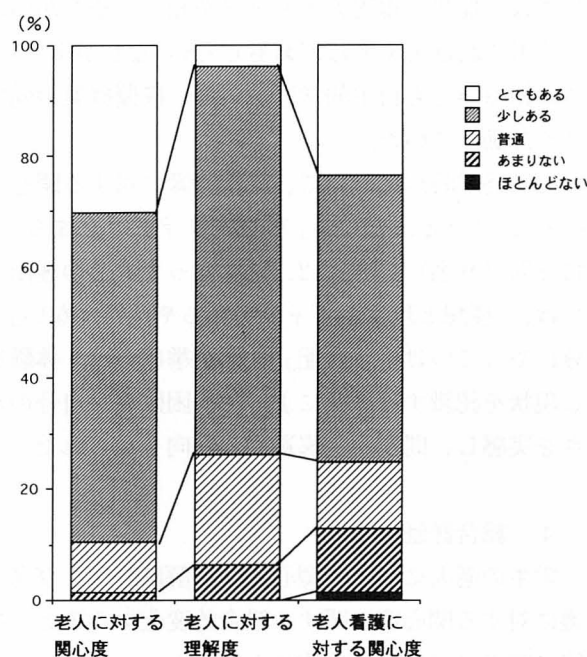


図4 授業終了時における老人に対する関心度、理解度および老人看護に対する関心度の比較

真剣に聞くことができた」という学習の共有の効果を表わすものもあった。

### 3 老人看護に対する関心度の変化 (図3、表1)

老人看護に対する関心度については、授業開始前では、無関心側に傾いており、「ほとんどない」44.7% (34名)、「あまりない」18.4% (14名)の合計は63.1%であった。老人看護に無関心の理由としては、ここにおいても偏見・誤解、知識不足に関するものがあげられた。具体的には「老人は成人の延長にすぎない」など、成人とは異なった独自性を見出せないことや、社会的話題性の高い、寝たきり、痴呆老人のもつパターン化された老人看護のイメージからみた「大変」「食事、排泄、褥瘡予防だけ」といった介護的側面しか見えないなどの理由が挙げられた。

授業開始前から興味をもっていた率は低く、「とてもある」2.6% (2名)と「少しある」15.7% (12名)の合計は18.3%であった。その理由としては「地域・訪問看護に興味がある」「祖父母の病気の経験」などが挙げられた。

一方、授業終了時の老人看護に対する関心度は上昇し、「少しある」51.3% (39名)、「とてもある」23.6% (18名)の合計は74.9%であった。個々の対象について詳細にみると、もともと関心のある者は授業終了時に更に関心の高まりを示す傾向にあった。その理由と

しては、「理想と現実のギャップを知ってやりがいがある」「考えれば考えるほどおもしろい」などが挙げられ、ここにおいても自主的学習および、模擬授業の効果を高く評価していた。

授業終了時点において、老人看護に対する関心が低い率は、「ほとんどない」1.3%（1名）、「あまりない」11.8%（9名）の合計12.2%であった。その理由としては、「理想と現実のギャップからやりたくない」「自分にやっていけるか心配」などが挙げられ、体験を通し現状を認識することによって、困難さ、自分の未熟さを実感し、問題から逃避する傾向も見られた。

#### 4 総合評価（図4）

学生の老人に対する関心度・理解度、および老人看護に対する関心度に関する総合的变化をみると、授業終了時点において全体的に上昇した。

それぞれの変化の特徴を見ると、老人に対する関心度については、授業による効果が最も現れており、終了時に「ほとんどない」「あまりない」とする者は約10%にとどまっていた。

次に老人に対する理解度については、これは全員が上昇していたにもかかわらず、他の2項目と比較すると終了時に「とてもある」と答えた者が最も少なく、「少しある」程度にとどまっていた。その理由としては多くの学生が老人に対する理解について「不十分」と述べていたことが関係している。これは老人問題に広がる世界は奥深いため、十分理解したとは言えない状態であることを自覚し、老人理解の困難さを実感した結果であると評価できる。

最後に老人看護に対する関心度については、授業終了時点において、効果の段階に最もばらつきがみられた。これは、学習に伴うさまざまな要因、すなわち動機づけの正の強化および負の強化、他の看護領域への強い関心、学生自身の将来の職業としての選択の関心、あるいは具体的な祖父母の病気体験などが影響しあった結果であると考えられる。

## 考 察

以上の結果をもとに教育効果と、今後の教育のあり方について考察する。

結果全体をみると、教育方略が今回の学生の変化に大きな影響をおよぼしていることがわかる。

教育方略とは、単に教育内容を教師がテキストに書かれてあることを説明したり、自分の体験を語るといった従来の一方通行の「教授法」だけではなく、指導目標を達成するために、その時々学生の学習状況に合わせてさまざまな方法を駆使して学生の主体性を引き出す授業を創ることであると考えられる。そのためには、教師は学生の反応を把握し、どの単元でどのような方法が効果的であるかを判断していくような戦略が必要である。

今回の調査では、老人に対する授業開始前の関心度は低く、マイナスイメージを持っている者が多かった。これは小山ら<sup>1)</sup>や、高崎ら<sup>3)</sup>の研究と同様の結果であった。学生の学習に対する準備状況は低かったのである。そこで、このような学生が、まず老人に関心を持ち、偏った見方を是正していけるように時期、方略を考えて授業を行ったところ、学生は次のようにいくつかの方略について評価している。

その一つとして、老人との直接の交流が挙げられる。今回、学生は5月に「老人に生活史をインタビューする」という課題を通して、老人から語られた生活史に伴う経験と感情とを体験した。また、夏季休暇中の課題として「老人ボランティア」を体験している。ボランティアの内容、時間、場所については学生が選択した。それらの体験から、老人とは自分がそれまでイメージしていたものとは異なり、個性豊かな存在であることに気づくことができている。これを従来のように、教師がテキストに書かれてある老人の特徴について説明するのを聞いたり、老人のVTRを見るだけでは老人の存在を身近に感じることはできないであろう。学生はそれまでほとんど話をしたことのない老人にインタビューするために自分で老人を捜し、その目的を説明し話を聞いた。この体験が多くの学生にとっては、自分の五感を使って老人を知る第一歩であったであろう。そして、その体験が次のボランティアに活かされ、老人と時間を共有することでさらに老人理解につながったものと考えられる。

次に、体験学習の効果について述べる。今回学生は、老人の役割を演じて排泄、食事、車椅子による移動、などさまざまな体験を通して、老人の心理に近づくことができている。このような体験学習については、高崎ら<sup>3)</sup>のおむつ体験、鳴海ら<sup>4)</sup>の腰曲げ歩行など、老人を理解するための教育効果が報告されている。これらの体験は老人と同一化する効果があると言われており、

疑似体験を通して、学生は文字通り「老人の身になって」その体験を考えることができ、理解は深まったものとする。

さらに、鳴海ら<sup>4)</sup>は「体験で動いた自分の心を通して老人を述べさせるという一連の流れの中で老人の理解が深まっている」と、体験直後に行うディスカッションの重要性を述べている。その理由としては、自分の体験をもとに他者に話すことによって、自分の考えを整理すること、また一人でできる体験は限られているが、それらについて話し合うことによって、学習の共有が可能であることなどが考えられる。今回の結果からも体験を話し合うことにより得られた効果は大きかったが、その話しあった結果を模擬授業という方法で“教える”というレベルにまで高めたことで理解はさらに深まったと言える。

以上のことから、教育方略がいかに学生の学習意欲に影響を及ぼすかが再認識できた。

最後に今回の教育方略を、カリキュラム全体との関連において検討する。

看護教育の最終目標は対象の理解にとどまらず、看護に関心を持ち、看護の楽しさを見い出すことにあると考える。その意味では、今回の調査では、授業終了後においても看護に対する関心度には、ばらつきが見られた。その理由の一つとして学習内容が疑似体験にとどまり、実際の老人への援助を経験することができなかったことが考えられる。小山ら<sup>1)</sup>が老人との生活経験は老人ケアに対する態度には関係なく、実際に援助した体験がケアについて肯定的な影響を与える傾向がある、と述べているように、老人看護に関心を持つためにはケアの経験は不可欠であろう。

しかし、今回実施した老人看護学の授業は、2年生が対象であり、学生はまだ臨床実習を経験していない時期であり、教科の時間的に制約があることを考慮すると、看護の関心を高める段階にまで至らなかったこともやむを得ないであろう。また今回は、教育評価を老人看護学の中でのみ行ったが、今後は老人看護学の位置づけを明確にし、学生が段階的に成長できるよう

準備状態に応じた教育方略を、カリキュラム全体の中で再検討していく必要がある。

## 要 約

今回、老人看護学では、講義に加え、体験学習、セミナー、模擬授業等を取り入れた教育効果を、学生の老人に対する関心度、理解度、及び老人看護に対する関心度の変化をもとに検討した。

授業開始前における学生の老人に対する理解は表面的なものにとどまっており、学習の準備状態は低かった。しかし、終了時にはそれぞれの項目において変化の特徴は見られたものの、全体としては学生の老人に対する関心度・理解度、および老人看護に対する関心度すべてにおいて上昇していた。その変化に効果的な影響を与えたものが教育方略であった。その内容としては、①老人との直接的な交流、②老人の身になる疑似体験、③討議と発表、などが挙げられる。

## 文 献

- 1) 小山真理子、牛山真佐子、田村正枝、菱沼典子、村嶋幸代、太田喜久子、看護大学学生の老人および老人ケアに対する態度、看護教育、36、pp815-819、1995.
- 2) 宮脇美保子、松浦治代、井山壽美子、老人看護学における教育方略の評価、鳥医短大紀要、25、31-36、1996.
- 3) 高崎絹子、坂口千鶴、谷口好美、老人看護学の理念と教育の展開、Quality Nursing、1、pp16-33、1995.
- 4) 鳴海喜代子、遠藤英子、佐瀬真粧美、坂口千鶴、山本明美、老人を理解するための体験学習の意義について、第23回日本看護学会集録、看護教育、pp156-159、1992.

(受付 6. 3. 1996)

## Summary

We conducted a research on the interest and understanding toward the aged people, and the degree of interest in gerontological nursing among student nurses. About a half of them took no

interest in, or had some biased views about the aged before they studied gerontological nursing. The biggest reason was that they didn't have any experience to spend with the aged. That's who they have any biases about the aged.

After the class their interest was increased. They answered the reason for increase was through talking with the aged.

We should note that although all the students described their understanding had somewhat increased, about 70% of them answered their understanding was "not enough".

However the interest in gerontological nursing was still low even after the class as compared with the interest and understanding toward the aged. The student nurses answered the main reason was that they "can have no confidence" when they have to work as a gerontological nurse.